

青年期の親子関係における相互依存性の構造*

黒川正流・林 春男・小島美樹**

広島大学総合科学部人間行動研究講座
(1992年9月1日受理)

Interdependence in the parent and adolescent child relationship

Masaru KUROKAWA, Haruo HAYASHI and Miki KOJIMA

Abstract: On the basis of Thibaut and Kelley's interdependence theory, this study attempted to clarify the structure of parent-child relationship, one of the most vital personal relationships.

We created three hypothetical decision-making situations (vignettes) that would occur for the majority of relationships between parents and their adolescent children. Each situation can be conceptually described in terms of 2 x 2 matrix format, in which both a parent and a child have two behavioral alternatives to choose from. The subjects were first graders at junior- and senior-high school and their parents. Both the parent and the child expressed their own preferences for each of the possible four combinations of the behavioral alternatives as to the three vignettes. Control scores were calculated for reflexive control (RC), fate control (FC), and behavior control (BC).

Results indicated that; (1) Interdependence patterns were quite stable across the three situations, suggesting that parent and child are interdependent more at the dispositional than the given matrix level; (2) The parents showed consistent interdependence patterns with almost no RC, but a high degree of BC. High school children, however, indicated much higher degrees of RC and FC compared with Junior High school children. These results suggest that children become more self-interested and try to exert their control as they get older, while the parents will basically be happy as long as it corresponds with what the children want to do.

Key words: interdependence, parent-child relationship, outcome matrix,
Reflexive-control, Fate-control, Behavior-control

* 本研究は、平成4、5年度文部省科学研究費補助金（一般研究C、課題番号04610059、代表者・黒川正流）の助成によりとりまとめたものである。

** 現所属：山口市みほり学園
Therapist of Mihori-Gakuen

本研究は、Kelley らの対人関係における相互依存性の理論 (Thibaut and Kelley, 1959; Kelley and Thibaut, 1978; Kelley, 1979) で用いられる 2×2 マトリクスを分析用具として、青年期の親子関係の相互依存構造を吟味するものである。

Kelley らの理論は対人関係における相互依存の問題を分析するための有用な概念枠組みを提唱するものであり、Kelley (1979) ではその枠組みによって、恋人同士、夫婦、同棲中のカップル、親友、といった愛情や友情を根底とする「親密な個人的関係性」が分析されている。彼は分析の対象に異性の二者関係を取り上げる理由として、近年の Personal relationships の研究知見の多くが男女の二者関係に基づいていること、何よりも家族という文脈における密接な異性間の関係性こそが社会的態度や価値や技能の獲得と習熟の場として最も大切な状況を構成していること、などを挙げている (p. 2)。こうした説明には、アメリカの家族における夫婦関係の圧倒的な中心性が反映されている一方、親子関係や同胞関係など夫婦関係以外の人間関係の家族内での位置づけは見えてこない。こうして、夫婦や恋人といったヨコの関係の研究に比較して、世代を異にするタテの関係としての親子関係については、相互依存性という観点からの実証研究がほとんど見られない。

Kelley 自身、個人的な関係ならどんな関係にもこれらの概念が適用できると述べているように、親密なヨコ関係に適用される分析概念は、少なくともわが国では重要なタテの人間関係である親子関係に関しても有効な分析用具であると思われる。

さて、親子関係における相互依存の様態は子どもの発達段階と家族のライフサイクルに応じて変化するであろう。自己の内面に関心が向けられ、自己が確立し始める青年前期の中学生には、親からの自立欲求と親への依存欲求がアンビバレンツに共存すると思われる。青年中期の高校生になると、依存欲求よりも独立欲求が優位になるであろう。父母との関係についていえば、子どもの年齢が高くなるにつれて「父親とも母親ともうまくいっている」と感じている者の割合が減少し、とくに男女とも高校生で激減するという調査もある (落合良行, 1984)。この調査はまた、女子中学生と父親の関係の困難さを示唆している。青年の依存対象は、中学生、高校生、大学生とすすむにつれて、男女ともに、友人や自己を依存対象とする順位が上昇する一方で、親に対する依存度は、女子と母親の関係を除いて低くなる傾向が見られる (加藤, 1977)。青年期の子どもの価値観や人生観の急速な変化の故に、親子は相互の行動に対する期待や評価が困難になるであろう。相手が自分に何を期待し、自分のどの行動が相手にどのような帰結をもたらすのかという基準が変動すると考えられるからである。いわゆる登校拒否や家庭内暴力を典型とする親子の葛藤・断絶・離反といった現象の一因は、親子関係の相互作用事象について相手側の心理的報酬とコストの推定に正確さが欠けることではないであろうか。

本研究では中学生と高校生の親子が日常的に体験するレベルの相互作用状況を設定し、相互依存構造の年齢差を検討し、さらに一定の相互作用の帰結に対する相手方の満足度を推定する際の正確さについても吟味する。

方 法

普通の親子が体験したり、容易にその状況に自分を置いて考えることのできる仮説的な相互作用状況を質問紙上に設定し、各自がそれぞれ二つの行動選択肢をもつ場合の4通りの事象について成果の評定を求めた。

当該状況における行動選択の帰結が与えるインパクトの大きさに変化をもたせることを考慮して、中学生については3状況、高校生については5状況を設定した。内容については別表を見られ

たい。ただし、本報告では高校生についても中学生と共通の3状況についてのみ扱う。

【調査Ⅰ. 中学生親子】対象者：広島市立中学校1年生計85名（男40名、女45名）とその親（父親41名、母親44名）。

相互作用状況：①親子で外出して昼食に子どもの好きなカレー店に入るか親の好物の日本そば屋でそばを食べるかの選択（以下昼食）、②放課後の時間をクラブ活動に励むか学習塾に通うかの選択（自由時間）、③合格した高校のうちA校に進学するかB校に進学するか（進学）。

回答方法：中学生対象者は、クラスごとに教師の指示に従って回答した。状況ごとに各場面に自分が置かれた場合を想定して、そのとき体験するであろう満足度または不満度を+3点から-3点までの7段階尺度で評定した。親対象者にはあらかじめ研究の目的と主旨を記載した依頼状を配布し、親用の質問紙を子どもに持ち返らせ、回答記入後研究室宛に郵送してもらった。親には自分の成果だけでなく、同じ事象における子どもの成果についても推定を求めた。子どもの男女別に父親と母親が同数になるよう父親用または母親用と印刷した質問紙を無作為に割り当てた。

【調査Ⅱ. 高校生親子】対象者：広島市内の県立高校1年生185名（男76名、女109名）とその親（父親90名、母親95名）。

相互作用状況：中学生用に設定した3状況に、④親の転勤に伴って転校するか下宿して留まるか（転居と転校）、⑤異性のとの交際を継続するか中止するか（男女交際）を加えて5状況とした。ただし状況③の「合格した高校」は「合格した大学」に修正した。

回答方法：中学生親子とほぼ同様であるが、高校生には各事象での自分の成果の他に、親の成果についての推定をも求めた。

つぎに、中学生用質問紙の状況①の例を示す。この他の状況については、appendix に示すことにする。

あなたはカレーが大好きです。お父さんはそばが大好きです。ある休日に、あなたはお父さんと二人でちょっと遠くにでかけました。昼食どきになったので食堂をさがしたら、カレーの店とそば屋が見つかりました。

（場面1）お父さんはそばを食べたいのをがまんして、あなたと二人でカレーの店であなたの好きなカレーを食べました。このときのあなたの気持ちは

（場面2）あなたはカレーの店で好きなカレーを一人で食べ、お父さんはそば屋で好きなそばを一人で食べました。このときのあなたの気持ちは

（場面3）あなたはカレーを食べたいのをがまんして、お父さんと二人でそば屋でお父さんの好きなそばを食べました。このときのあなたの気持ちは

（場面4）あなたはそば屋でお父さんの好きなそばを一人で食べ、お父さんはカレーの店であなたの好きなカレーを一人で食べました。このときのあなたの気持ちは

被験者は各状況の4つの場面すべてについて、想像される満足度を-3点から+3点までの7段階尺度で評定したが、先行研究との比較を容易にするために、回答を+10点から-10点までの21段階尺度値に変換した。

結 果

親用の質問紙には氏名等の記入を求めなかったが、子どもの発達段階による差異と親子の性別組

合せの効果を吟味する目的で、子ども用質問紙との突合せが可能になるよう工夫した。回収後の質問紙の親子のマッチングができたのは、中学生について42組（父-男児10組、父-女児11組、母-男児10組、母-女児11組）、高校生について 101組（父-男児16組、父-女児30組、母-男児24組、母-女児31組）であったので、以後の分析対象をこれらの親子ペアに限定して分析した。

ところで、Kelley and Thibaut (1978) によれば、相互依存は相互作用している人々が互いに及ぼす効果に依拠している。つまりそれは、相互の態度についての影響とか、感情の伝染とか、情報の交換として定義できるし、一方の行動が相手の反応の刺激となるような、行動に及ぼす相互的な効果と定義することもできる。Thibaut and Kelley (1959) は、相互作用が当事者にもたらす感情的な帰結つまり相互作用の成果 outcome を、各当事者がその相互作用から受け取る満足や喜びのような報酬と利益、および相互作用を維持することによる不満や不安のようなコストと罰の両面から評価し記述している。当事者の一方が他方にどれだけ報酬やコストを与えることができるか、つまり各自が相手の成果をどのように統制するかによって、両者の相互依存関係が記述できる。二者関係を表現する手段として、ゲーム理論でいう利得行列によるマトリクス表記法が用いられる。

《1.成果マトリクスについて》われわれが得た中学生親子42組の状況①の評定結果を、Kelley らに従って2×2マトリクスに表記すれば、Fig. 1のマトリクスIで示すことになる。マトリクスの各セルの対角線右上には親が評定した各場面の満足度（成果）の平均が、また対角線左下には子が評定した子の成果の平均が示される。

状況①昼食の選択

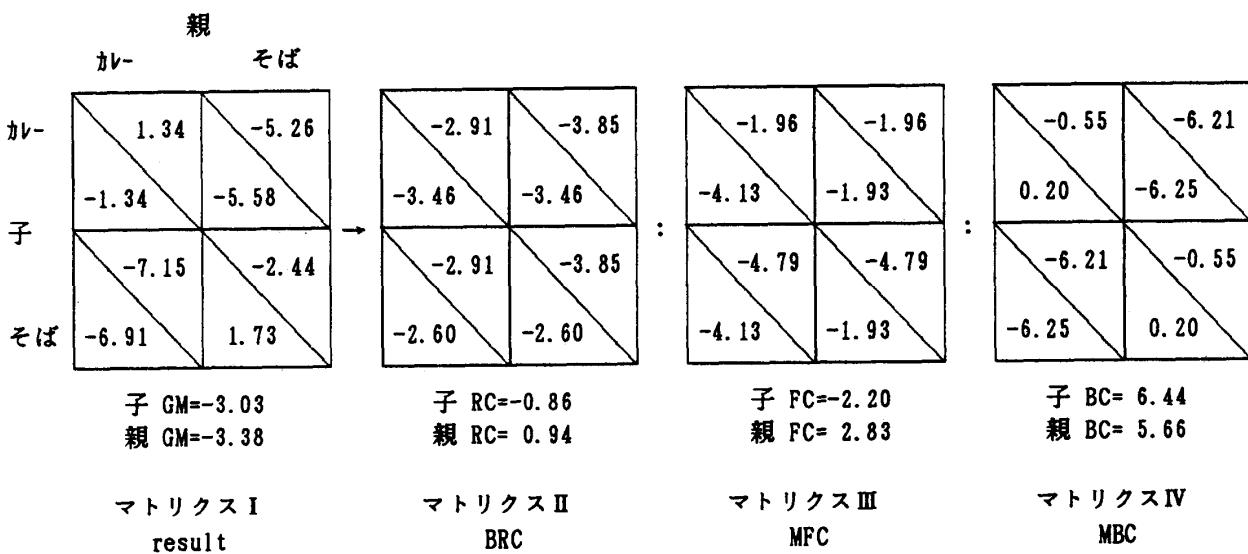


Fig.1. 昼食選択場面における中学生親子の成果マトリクスとその要素分析 N=42

この成果マトリクスからつぎのような事実を読み取ることができる。平均的な中学1年生は、自分が好きな（親は好んでいない）カレーに親がつき合って二人で食べる場合にわずかに不満であり、親子別々に各自の好みの昼食をとる場合にかなり不満を感じ、親がカレーで自分がそばのとき不満が高く、そして親の好物そばに自分がつき合う場合には不満を感じるどころかむしろ少し満足している。典型的な中学生の親は、子の好きなカレーにつき合って二人で食べるとき少々満足だが、親子別々に各自の好物を食べるときは子と同様に不満であり、子がそばを食べるのに自分がカレーを食べるとき最も不満で、子がそばにつき合ってくれてもやや不満である。中学1年生もその親も、

相手が自分の好物につき合ってくれる場合よりも、自分が相手の好物につき合っあげるときの方がハッピーであることが示唆される。

ところで、 2×2 マトリクスはその相互依存構造を分析するために、つぎのような3つの要素に分解される。

(1)親子はそれぞれ自分がカレーを食べるとそばを食べるとで、平均して自分の成果にどれだけの差異をつくりだせるかの指標となる効果。自分の成果に及ぼすこの効果は、それを実行する本人へ再帰的に作用するものであるから、再帰統制 (Reflexive control, 以下RC) と呼ばれる。RCは自分の行動選択肢の間の魅力の差異を表現しており、ここでは相手の行動はまったく関わりをもたない。つまり、RCは依存性を表現しない概念である。RCだけからなるマトリクス (Fig. 1のマトリクスII) を相称的再帰統制 (bilateral- 以下BRC) という。中学1年生がこの状況でカレーを食べれば、親がカレーのとき -1.34 、親がそばのとき -5.58 であるから、平均して $[(-1.34) + (-5.58)] / 2 = -3.46$ ほど不満である。もしこの中学生がそばを食べれば、平均して $[(-6.91) + (1.73)] / 2 = -2.60$ ほど不満である。カレーなら平均 -3.46 の不満で、そばなら平均 -2.60 しか不満でないから、子のRCは $[(-3.46) - (-2.60)] = -0.86$ となる。同様にして親のRCは $+0.94$ となる。(なおここでの規約として、どの要素もマトリクスの左上のセルが正の値のとき $+$ 、それ以外のとき $-$ の符号がつけられる。)

(2)各人の成果が、相手がカレーを食べるかそばを食べるかで影響される程度。これは運命統制 (Fate control, 以下FC) と呼ばれる。FCのみで構成されるマトリクス (Fig. 1のマトリクスIII) を相互的運命統制 (mutual- 以下MFC) という。すなわち、親がカレーを食べると子は平均して $[(-1.34) + (-6.91)] / 2 = -4.13$ ほど不満であり、親がそばを食べると子は平均して -1.93 ほどの小さな不満であるから、子のFCは -2.20 である。子がそばを食べるときよりカレーを食べるときの方が親の平均不満度が小さいから、親のFCは $+2.83$ である。

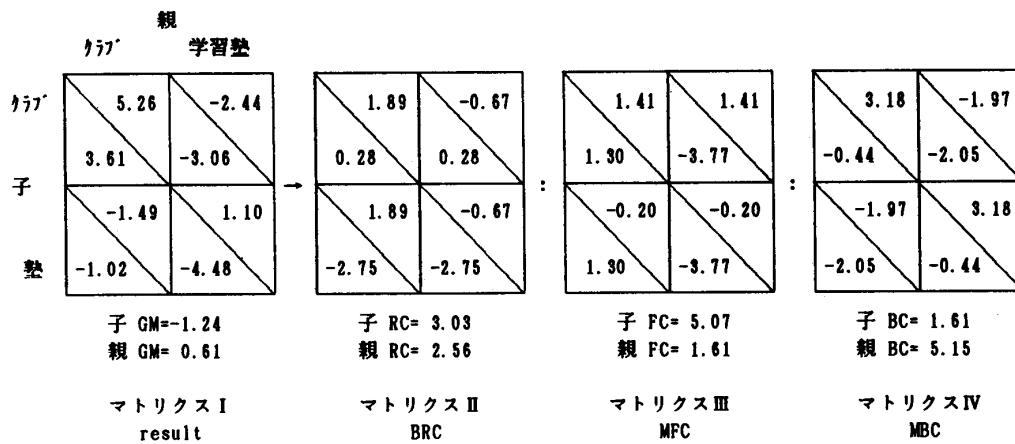
(3)各人が自分の行動を相手の行動に合致させるかさせないかの組合せによって、自分の成果が影響される程度。これは行動統制 (Behavior control, 以下BC) と呼ばれる。BCだけで構成されるマトリクスを相互的行動統制 (mutual- 以下MBC) という。親子二人でカレーかそばを食べるとき、子は平均して 0.20 、親は平均して -0.55 の成果となり、親子が別々にわかれて互いに違うものを食べる時、子の平均成果は -6.25 、親の平均成果は -6.21 であるから、子のBCは 6.44 で親のBCは 5.66 となる。一方がカレーかそばかの行動選択肢を変更すれば、他方もそれに合わせて自分の行動選択肢を変更するよう動機づけられるわけである。

二者間の依存性を規定する要素はFC要素とBC要素である。Kelley (1979) によれば、MFCが成立する相互作用では、二人がそれぞれ相手のために役立つ行動選択肢をもっていて、相手が自分に何をしてくれるか、また自分は相手に何をしてやれるかという行動の「交換」が問題になる。Kelleyらが自分たちの提言を「交換理論」の一つとして扱われることに反発する理由の一つは、相互依存の基礎的側面がMFCだけでなくMBCをも含むことである。MBCを含む相互作用では、互いの行動をどう「調整」するかが問題になるのである。

中学生親子の状況②および③の結果とそれらの要素マトリクスはFig. 2に示す通りであった。また高校生親子の状況①~③の結果はFig. 3の左端の3つのマトリクスで示される。ここではKelley & Thibaut (1978) に従って [結果 = BRC + MFC + MBC] が成立するように表記している。すなわちFig. 1の表記とは違って、BRCとMFCには結果マトリクスのそれぞれ対応するセルの値の平均ではなく、RCとFCの値と0が記入され、結果マトリクスの各セルからBRCとMFCの対応するセルの値を差し引いた値がMBCの各セルに記入されている。Kelleyらはさらに成果の一般水準、つ

まり二人の関係性の当該部分が二人にとってどれくらい報酬的であるかを示す指標として、各人の4つのセルの平均値すなわち総平均 GM (General Mean) を提唱している。われわれもそれに倣ってGMを表示した。親子別に中学生と高校生の状況ごとのマトリクス要素を図示したものが Fig.4-1 から Fig.4-6である。

状況②：自由時間の過ごし方



状況③：A校に進学するかB校に進学するか

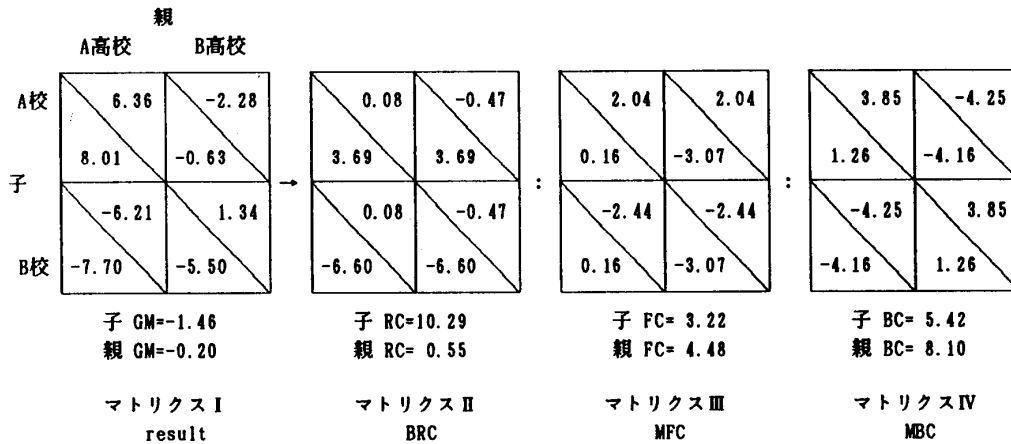


Fig.2. 中学生親子の相互作用場面（状況①および③）における成果マトリクスと要素分析
N = 42

《2.RCについて》 Fig.4-1およびFig.4-2から明らかなように、親子間にRCの傾向についての顕著な相違が存在する。子の結果を見ると、行動選択の帰結のインパクトが大きいと想定された状況ほどRCの値が大きくなる傾向が認められ、中学生に比べて高校生の方がRCの値が有意に大きかった。このことは、発達につれて、子どもたちは行動選択の重要度が高いほど、何をしたいかについて明確な選好をもつようになることを示唆している。一方、親のRCの値には、子の発達段階や行動選択の重要度による差異は認められなかった。いずれの場合もRCの値がきわめて小さいことが特徴であった。換言すれば、設定された3つの相互作用状況では、親にとっては2つの行動選択肢の間に選好はないのである。一方、子にしてみれば、昼食に何を食べるかは親に従ってかまわないが、進学する学校の決定には自分の選好が強く働くのである。

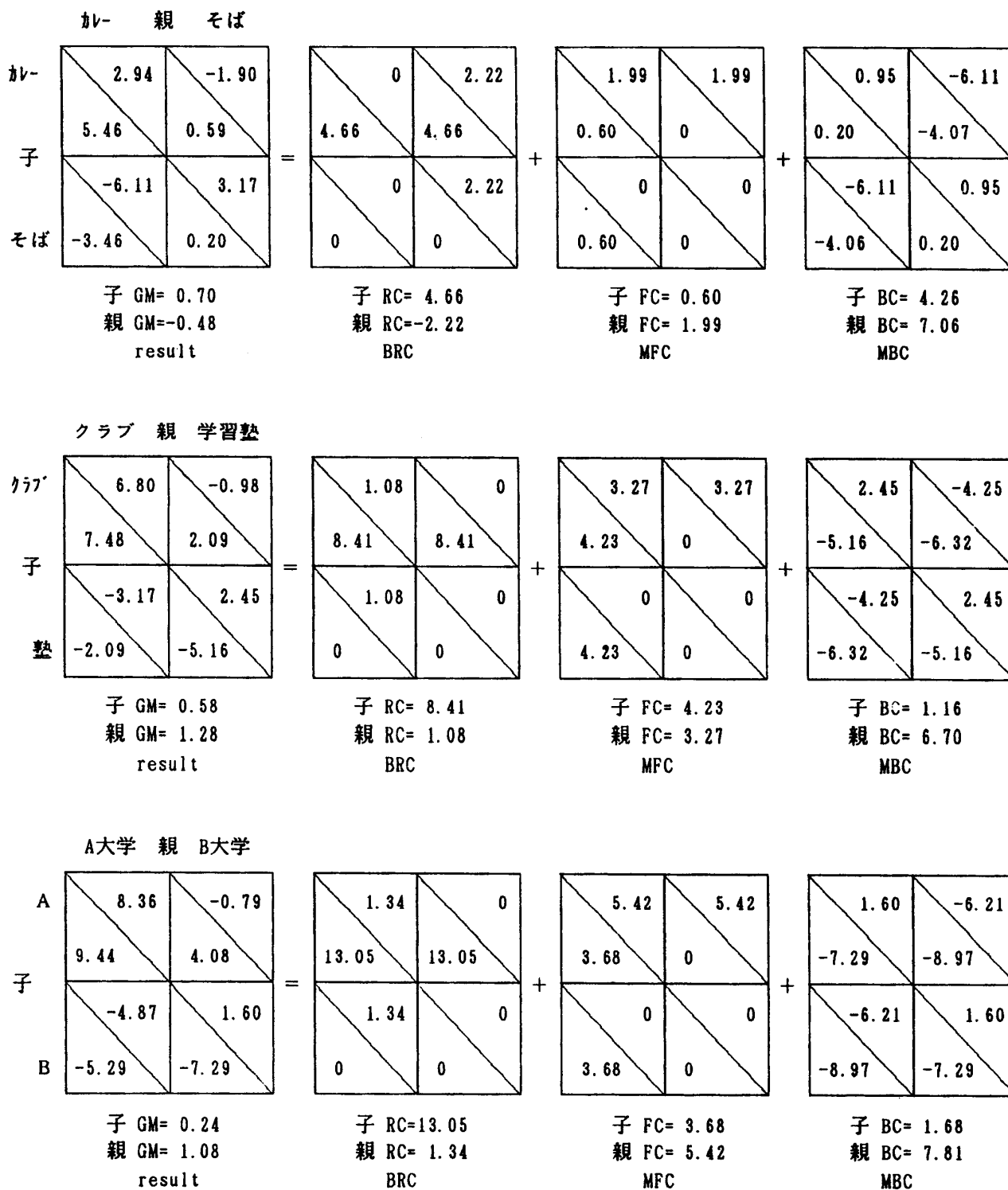


Fig.3. 高校生親子の相互作用場面における成果マトリクスと要素分析 N = 101

〈3.状況の特徴について〉

Fig.4 から総体的につぎのような状況の特徴が示唆されよう。状況①の昼食選択場面では、親も子も行動統制BCが大きく、どちらも自分の好みを実現することより相手の選択した行動に自分の行動を合わせることの方が大事である。放課後の自由時間をクラブ活動で過ごすか学習塾に通うかの状況②では、親のBCに比べて子のFCが相対的に大きいことから、子は自由時間を親の希望に合わせることは望まないのに親の行動（クラブと塾のどちらを勧めるか）によってかなりの影響を受けることが示唆されている。状況③の進学校選択場面では、子は親に依存せず、むしろ親が子の行動選択に合わせて自分の行動を調整しようとする様子が伺える。

総平均GMについては、Fig. 2 およびFig. 5 に示すように、中学生については3つの状況すべてで、中学生の親と高校生の親については状況①昼食選択場面で負の値を示した。それ以外のGMもほとんど0に近いものであった。

〈4.親子間相互依存のパターンについて〉

親子間の相互依存構造が行動の交換 (exchange) を主体とするものか、あるいは行動の調整 (coordination) を主体とするものかという観点から、親と子の関係を分析した結果がFig. 6 に示される。図の横軸はFCの値、縦軸はBCの値を表している。したがって図中の2本の斜交線上ではFCの量とBCの量が等しくなることを意味し、この2本で挟まれる $|BC| > |FC|$ となる図の上下部分は調整を主体とする相互依存関係を示す領域である。こうして $|FC| > |BC|$ となる図の左右部分は行動の社会的交換を主体とする相互依存関係を示す

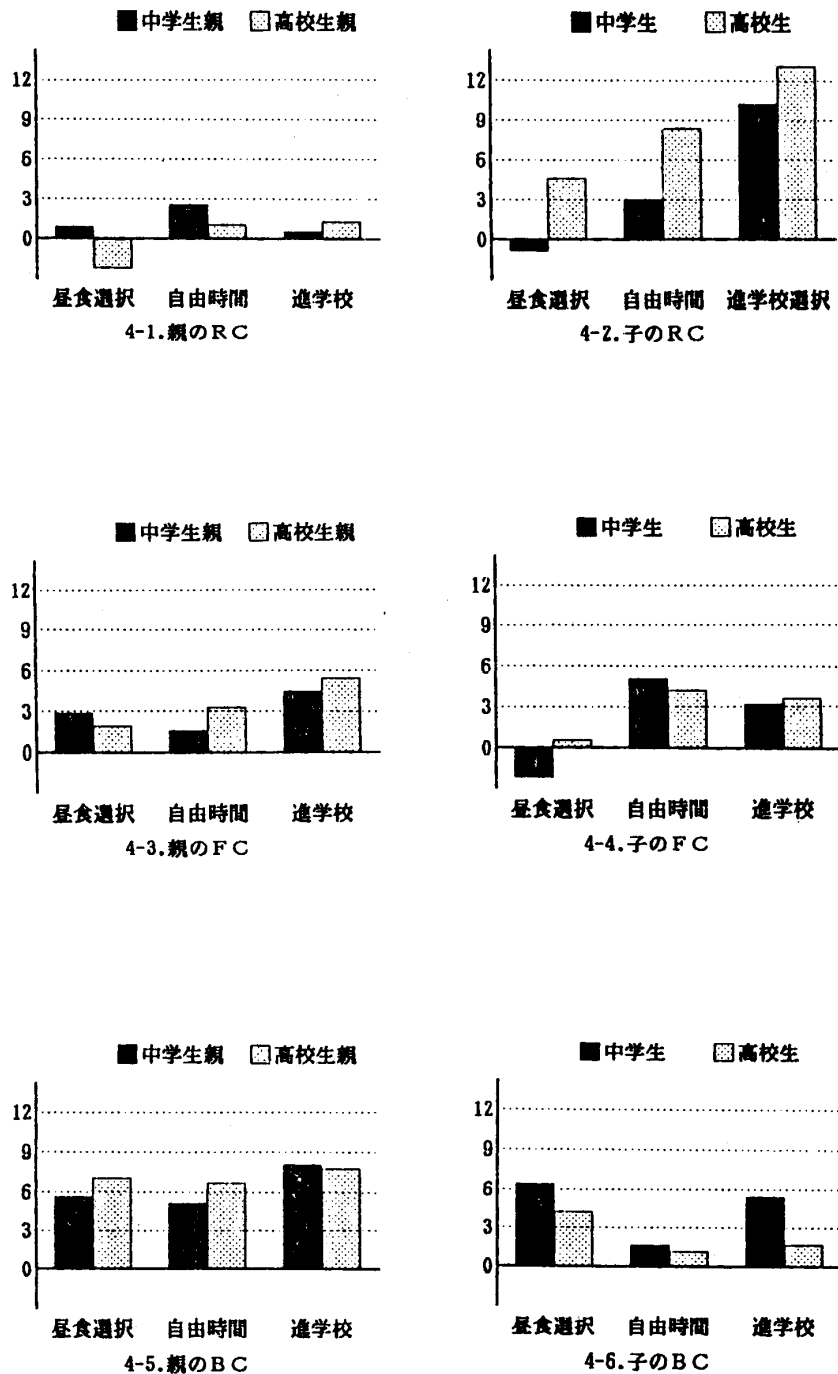


Fig.4. 状況別親子別のRC, FC, BC

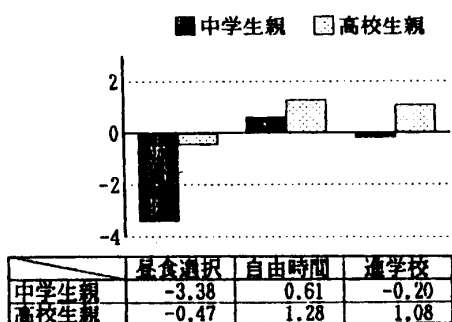


Fig.5-1. 親の総平均GM

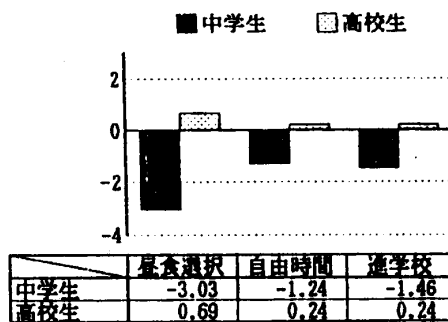


Fig.5-2. 子の総平均GM

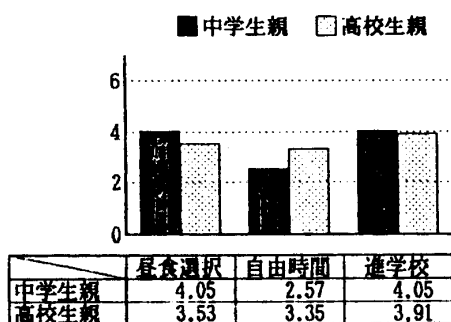


Fig.5-3. 親の修正総平均GM'

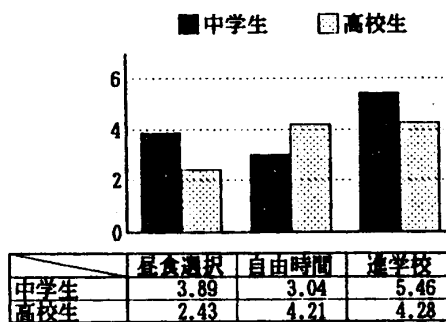


Fig.5-4. 子の修正総平均GM'

Fig.5. 総平均GMおよび修正（絶対値）総平均GM'

領域である。この平面上に、それぞれの状況ごとのFCとBCの平均値をプロットし、発達段階による差異を矢印で表現した。

子どもについて見ると、行動選択結果のインパクトが大きいと想定した状況②と高校生の状況③

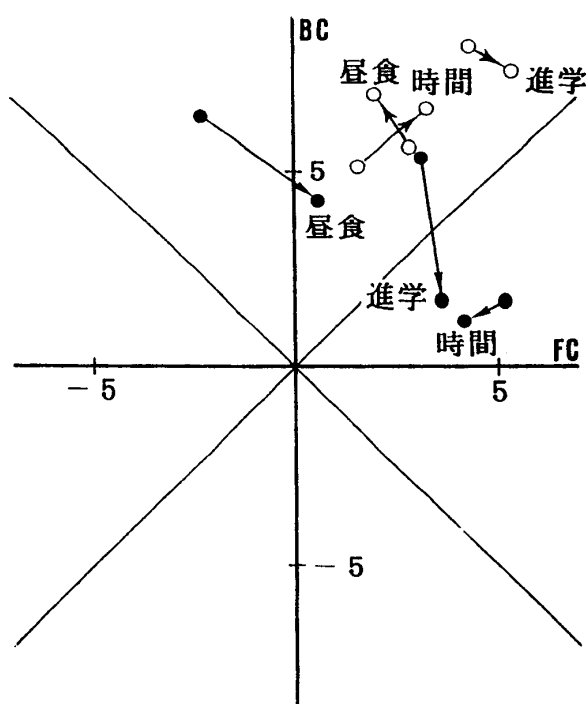


Fig.6. FC・BC平面からみた親子間の相互依存構造と発達の変化
(○は親, ●は子の統制値)

が、第1象限の $|FC| > |BC|$ 領域にプロットされた。この結果は、親子間の行動の一致を望みながらも、子どもは中学低学年から高校生に発達するにつれて、親子関係を行動の交換を主体とした関係として捉えるようになることを示唆している。それに対して、親の場合は第1象限の $|BC| > |FC|$ 領域にすべて集中しており、子どもの発達段階による系統的な変化は見られなかった。このことから、親の相互依存関係は子どもの発達段階にかかわらず安定しており、行動の調整を主体としたものとして捉えられていることが示唆される。

〈5.親子間の状況認知について〉 親密な間柄の相互依存関係の特徴の一つは、相手の成果に感応的な相互作用である。自分の成果の大小つまりRCだけで行動が決定されるのではなく、行為者自身の直接当面の利害から隔たった行動が相手のために生起する。そのために相互作用の当事者は、

行動選択に伴う自分の利害と相手の利害を総括的に認知し、場面の構造を了解していなければならないし、しているはずである。

われわれは高校生とその親に、各状況の4つの場面での相手の成果についても推定するように求めた。

Fig.7-1、7-3、7-5は親が評定した自分の成果と推定した子の成果、すなわち親からみた場面の構造を示している。またFig.7-2、7-4、7-6は子が評定した自分の成果と推定した親の成果、すなわち子からみた場面の構造を示している。状況①で親子がともにカレーを食べるとき、親は2.9点満足し、子は5.5点ほど満足である。しかし親の認知では子の満足は実際より高くまた親自身より高い7.4点であり、逆に子の認知では親の満足は自分や実際よりも低い0.4点である。また親がカレーを食べ、子がそばを食べるとき、子は自分も親も-3.5点程度の不満だと認知しているのに、親は自分も子も-6点以上の不満だと感じている。このようにして、子のRCは4.7であるのに親の推定では子のRCが9.2となり、カレーとそばの行動選択の選好の大きさを実際の2倍程度過大に認知している。

子の成果についていえば、いずれの状況でも子が自分の選好に合わせて行動するときプラスであり、親も「子が満足している」と認知している。親の成果についていうと、親の選好にかかわらず親子の行動が一致するときプラスであり、子もそのように認知している。

状況②および③では、子が選好を貫いて親の行動とマッチしなかった場面で、子が親の不満を過大に認知する傾向が認められる。他方、昼食の選択というインパクトの小さな事象ではむしろ親は

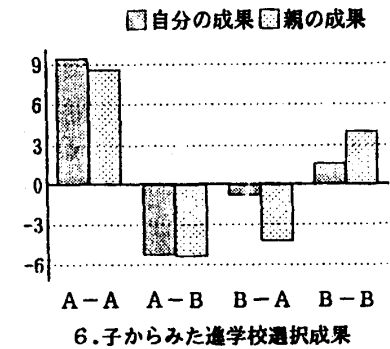
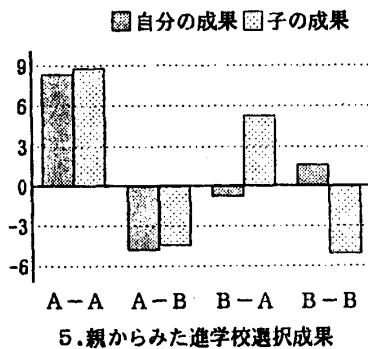
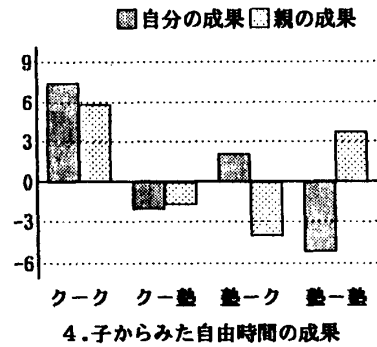
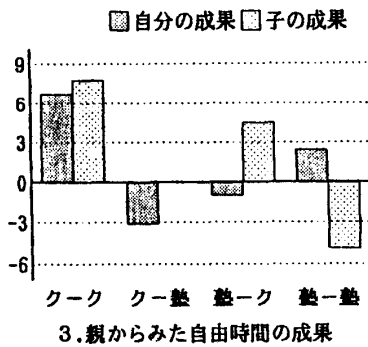
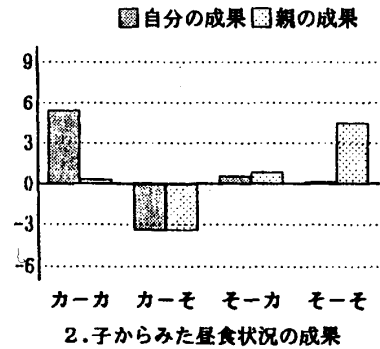
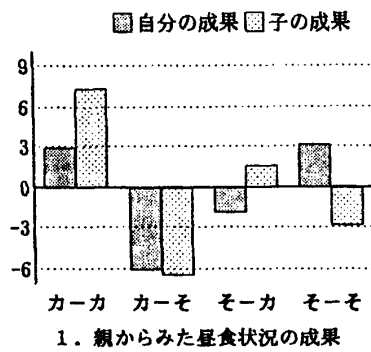


Fig.7. 親からみた状況と子からみた状況の場面構造
(各セルの左側が自分の成果、右側が相手の成果の推定)

子の気持ちを過大に思いやり、重要な事象では親の推定は比較的正確に行われるようである。

考 察

以上の結果から、親子関係における相互依存構造について、つぎのことが指摘できる。①親と子の間には、個々の相互作用状況を超えた一貫する傾向を認めることができる。すなわち、ほとんど再帰統制RCをもたず行動統制BC主体の相互依存を示す親に対し、子どもは発達とともにRCを増大させ、運命統制FC主体の相互依存性を示す、という傾向である。ここには行動選択のもつインパクトの大きさや発達段階による差異も示唆されており、こうした一貫性が研究方法の感度不足によるアーチファクトとは考えにくい。②発達につれて自分の思う通りに事態をすすめたいという気持ちを強めながら、親が自分に同意してくれることを望んでいる子の姿と、本心ではとくに明確な選好をもたず、子の意向に合致することを配慮している親の姿が本研究の結果から示唆される。③それゆえ、親子間の葛藤解決のために、子の選好の明確な主張とそれに対する親の同意というシナリオが一つの方向として考えられよう。

ここで総平均GMについて述べておく。GMは各人のマトリクスの4つのセルの成果の平均であるから、「二人の関係性の当該部分が二人にとってどれくらい報酬的であることを示す指標」とされることは先述した。Kelleyらは「GMは別の代替的な関係性と比べた当該関係性への一般的満足度を反映するもの」(1978, p.30)と述べている。われわれの相互依存マトリクスのGMは、中学生についてはすべての状況で、中学生の親と高校生の親については状況①で負の値を示し、それ以外のGMもほとんど0に近いものであった。このことは、「親子の相互依存関係は平均的に報酬的であるよりも懲罰的である」ことを意味するであろうか。親子関係はいずれそれに代わる別の関係性に置き換えられるのかも知れないが、この結果から断定することはできない。またこの結果は、状況①②③の順に行動選択の帰結が親子の関係性に与えるインパクトが大きくなる、というわれわれの前提を支持するものでもなかった。関係性に与えるインパクトという観点からすると、小さなプラスの成果よりも大きなマイナスの成果の方に意味があるとも考えられる。そこで4つのセルの成果の絶対値の平均を算出して比較提示したものがFig.5-3と5-4である。しかしどちらも状況の特徴を示すには至らなかった。相互依存事象の関係性にとっての重要性を表す指標の考究が必要であろう。

相互作用における場面の構造をどう認知するかが、所与マトリクスをどのように実効マトリクスに変換するかの決め手であろう。相互作用相手が個々の事象をどう評価しているのかの推定の正確さについての考究が必要である。子が親の対応に不満であるのに、親は自分の行動が子に満足を与えていると誤信することがあるであろう。青年期の親子関係については、父親と母親、男児と女児の性別組合せの特徴についても検討すべきである。

文 献

- 加藤隆勝 1977「青年期における自己意識の構造」心理学モノグラフ 14, 東京大学出版会
- Kelley, H. H. 1979 *Personal relationships: Their structures and processes*. New Jersey: Lawrence Erlbaum. (黒川正流・藤原武弘共訳, 1989 親密な二人についての社会心理学, ナカニシヤ出版)
- Kelley, H. H. & Thibaut, J. W. 1978 *Interpersonal relations: A theory of interdependence*. New York: Wiley-Interscience.

- Kurokawa, M. & Hayashi, H. 1990 Interdependence in the parent and child relationship in Japan.
Abstract of 15th International Conference on Personal Relationships. p.27
- 落合良行 1984 親子関係の危機 (加藤隆勝(編) 思春期の人間関係, 大日本図書, pp.33-66.)
- Thibaut, J. W. & Kelley, H. H. 1959 The social psychology of groups. New York: Wiley.

Appendix 1

仮説的相互作用状況

状況②（自由時間）

あなたはクラブで期待される人物として活躍しています。同級生には学習塾にかよっている人も大勢いますが、あなたはクラブ活動がいそがしくて勉強する時間があまりありません。

（場面1）お父さんは「中学時代のクラブ活動は大変よいことだから、クラブ活動をつづけなさい」と言います。そこであなたはクラブ活動を熱心につづけます。このときのあなたの気持ちは……

（場面2）お父さんは「クラブ活動はいいかげんにして、塾に通って勉強しなさい」と言います。しかしあなたはクラブ活動を熱心につづけます。このときのあなたの気持ちは……

（場面3）お父さんは「クラブ活動はいいかげんにして、塾に通って勉強しなさい」と言います。そこであなたはクラブ活動をやめ、塾に通って勉強することにしました。このときのあなたの気持ちは……

（場面4）お父さんは「中学時代のクラブ活動は大変よいことだから、クラブ活動をつづけなさい」と言います。しかしあなたはクラブ活動をやめ、塾に通って勉強することにしました。このときのあなたの気持ちは……

状況③（進学）

あなたはA高とB高の2つの高校に合格しました。あなたがぜひ行きたいのはA高で、B高にはあまり行きたくありません。お父さんは、あなたをお父さんの行かせたい高校にぜひ行かせようとしています。

（場面1）お父さんは「お前はA高に行きなさい」と言います。そこで、あなたは自分の希望するA高に入学しました。このときのあなたの気持ちは……

（場面2）お父さんは「お前はB高に行きなさい」と言います。しかし、あなたは自分の希望するA高に入学しました。このときのあなたの気持ちは……

（場面3）お父さんは「お前はB高に行きなさい」と言います。そこで、あなたはお父さんの希望通りに、自分のあまり行きたくないB高に入学しました。このときのあなたの気持ちは……

（場面4）お父さんは「お前はA高に行きなさい」と言います。ところがあなたはあまり行きたくないB高に入学しました。このときのあなたの気持ちは……

中学生の親用の例

状況①（昼食）

あなたはそばが大好きです。あなたの子供はカレーが大好きです。（以下同じ）

（場面1）あなたはそばを食べたいのを我慢して、子供と二人でカレーの店で子供の好きなカレーを食べました。

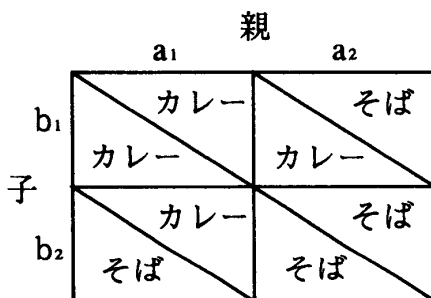
★このときのあなたの気持ちは……

★では、あなたはこのときのお子さんの気持ちはどうだと思いますか。

Appendix 2-1. 親子関係マトリクスの要素表

状況① 昼食選択場面

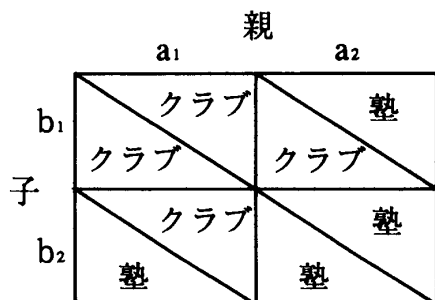
	中学生					高校生					
	n	全体	父-男	父-女	母-男	母-女	全体	父-男	父-女	母-男	母-女
親(a) 自己評定	ab ₁	1.34	1.65	1.20	2.31	0.30	2.94	2.89	2.75	3.57	2.66
	ab ₂	-7.15	-8.91	-5.40	-5.61	-8.70	-6.11	-7.01	-5.17	-6.32	-6.39
	aab ₁	-5.26	-7.59	-2.70	-6.60	-4.50	-1.90	-1.86	-3.52	-0.41	-1.49
	aab ₂	-2.44	-1.32	-1.80	-3.96	2.10	3.17	3.71	2.97	3.44	2.87
親の統制	RC	0.94	0.83	0.15	3.63	-0.60	-2.22	-2.99	-0.94	-2.89	-2.55
	FC	2.83	2.15	2.85	2.64	3.60	1.99	2.17	0.72	3.03	2.34
	BC	5.66	8.42	3.75	5.28	5.40	7.06	7.73	7.21	6.88	6.71
	GM	-3.38	-4.04	-2.18	-3.47	-3.90	-0.47	-0.57	-0.74	0.07	-0.59
子(b) 自己評定	ab ₁	1.34	-0.66	1.50	-1.98	-4.20	5.46	3.71	6.60	4.40	6.07
	ab ₂	-6.91	-5.61	-9.00	-6.93	-6.00	-3.46	-3.51	-2.75	-3.30	-4.26
	aab ₁	-5.58	-7.59	-6.60	-4.62	-4.50	0.59	-0.41	2.42	3.02	-2.55
	aab ₂	1.73	-1.32	-0.60	2.64	2.10	0.20	-0.21	0.33	0.96	-0.32
子の統制	RC	-0.86	-2.31	2.25	-1.16	-2.40	4.66	3.51	5.72	4.88	4.05
	FC	-2.20	-1.32	-0.15	-3.47	-3.90	0.60	0.41	0.55	-1.44	2.34
	BC	6.44	7.26	8.25	6.11	4.20	4.26	3.71	3.63	2.82	6.28
	GM	-3.03	-2.48	-3.68	-2.72	-3.15	0.69	-0.11	1.65	1.27	-0.27
親が推定 した子の 成果	ab ₁	4.79	4.62	6.30	4.62	3.60	7.35	8.04	7.26	7.29	7.13
	ab ₂	-7.86	-9.90	-6.00	-5.94	-9.60	-6.50	-7.42	-5.17	-7.42	-6.60
	aab ₁	-2.83	-1.32	-2.70	-2.31	-4.80	1.54	3.30	0.33	3.44	0.32
	aab ₂	-5.26	-4.62	-3.30	-5.94	-7.20	-2.94	-4.33	-3.19	-1.92	-2.77
親が推定 した子の 統制	RC'	7.54	8.91	6.45	7.10	7.80	9.17	11.55	7.98	10.04	8.41
	FC'	2.51	0.33	3.15	3.47	3.00	1.13	0.83	2.48	-0.83	1.49
	BC'	5.11	5.61	5.85	3.47	5.40	4.69	3.92	4.46	4.68	5.32
	GM'	-2.79	-2.81	-1.43	-2.39	-4.50	-0.14	-0.10	-0.19	0.35	-0.48
子が推定 した親の 成果	ab ₁						0.36	-0.41	1.32	0.96	-0.64
	ab ₂						-3.43	-2.89	-2.53	-3.57	-4.47
	aab ₁						0.91	0.41	2.09	1.65	-0.53
	aab ₂						4.51	4.54	5.94	3.44	3.94
子が推定 した親の 統制	RC''						-4.25	-4.13	-4.62	-3.85	-4.26
	FC''						0.10	-0.83	0	1.37	-0.32
	BC''						3.69	3.30	3.85	3.16	4.15
	GM''						0.59	0.41	1.71	0.62	-0.43



Appendix 2-2. 親子関係マトリクスの要素表

状況②自由時間：クラブか学習塾か

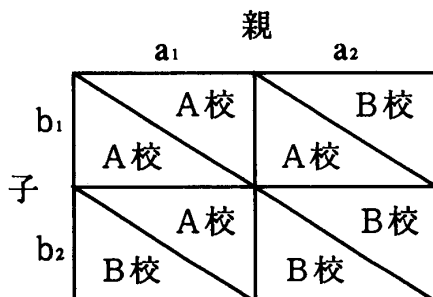
	中学生					高校生					
	全体 n	父-男 10	父-女 11	母-男 10	母-女 11	全体 101	父-男 16	父-女 30	母-男 24	母-女 31	
親(a) 自己評定	a _{1b₁}	5.26	5.28	6.30	6.60	3.00	6.80	7.01	7.70	5.64	6.71
	a _{1b₂}	-1.49	-1.98	0	-2.64	-1.50	-3.17	-3.09	-3.41	-3.71	-2.55
	a _{2b₁}	-2.44	-1.98	-2.10	-2.97	-2.70	-0.98	-0.21	-0.11	-2.61	-0.96
	a _{2b₂}	1.10	0.66	1.80	1.32	0.60	2.45	2.89	2.20	2.61	2.34
親の統制	RC	2.56	2.31	3.30	2.81	1.80	1.08	0.62	1.10	0.97	1.39
	FC	1.61	2.31	1.20	2.48	0.60	3.27	3.50	4.40	2.07	2.98
	BC	5.15	4.95	5.10	6.77	3.90	6.70	6.60	6.71	7.29	6.28
	GM	0.61	0.50	1.50	0.58	-0.15	1.28	1.65	1.60	0.48	1.39
子(b) 自己評定	a _{1b₁}	3.61	1.65	4.20	4.95	3.60	7.48	6.81	7.04	9.07	7.03
	a _{1b₂}	-1.02	0	-3.30	1.65	-2.10	-2.09	-1.65	-1.54	-2.34	-2.65
	a _{2b₁}	-3.06	-3.63	-2.10	-2.31	-4.20	2.09	2.68	2.09	1.37	2.34
	a _{2b₂}	-4.48	0.33	-3.60	-5.94	-8.40	-5.16	-4.54	-4.51	-6.32	-5.22
子の統制	RC	3.03	-1.16	4.50	3.47	4.95	8.41	7.84	7.59	9.55	8.62
	FC	5.07	2.48	3.30	7.43	7.05	4.23	3.51	3.96	5.84	3.63
	BC	1.61	2.81	3.00	-0.17	0.75	1.16	0.62	0.99	1.86	1.06
	GM	-1.24	0.99	-1.20	-0.41	-2.78	0.24	0.83	0.77	0.45	0.38
親が推定 した子の 成果	a _{1b₁}	6.84	7.59	7.20	6.93	5.70	7.81	8.25	8.36	7.84	7.03
	a _{1b₂}	0.55	-0.99	0.60	1.65	0.90	0.07	-0.41	0.88	-0.82	0.21
	a _{2b₁}	1.65	2.64	-0.60	4.95	0	4.49	3.30	4.51	5.02	4.68
	a _{2b₂}	-5.42	-5.28	-5.10	-5.28	-6.00	-4.93	-3.71	-3.74	-6.60	-5.43
親が推定 した子の 統制	RC'	6.68	8.25	5.55	7.76	5.40	8.58	7.84	7.87	10.14	8.47
	FC'	5.58	4.62	6.75	4.46	6.30	4.16	4.13	4.24	4.30	4.00
	BC'	-0.39	0.33	1.05	-2.48	-0.60	-0.84	0.83	-0.39	-1.48	-1.65
	GM'	0.91	0.99	0.53	2.06	0.15	1.86	1.86	2.50	1.36	1.62
子が推定 した親の 成果	a _{1b₁}						5.85	5.36	6.60	5.50	5.64
	a _{1b₂}						-1.76	-2.47	-1.21	-1.92	-1.81
	a _{2b₁}						-4.02	-4.33	-4.40	-3.02	-4.26
	a _{2b₂}						3.76	4.33	4.40	3.44	3.09
子が推定 した親の 統制	RC''						2.18	1.45	2.70	1.58	2.50
	FC''						-0.09	-0.42	-0.50	0.48	0.05
	BC''						7.70	8.25	8.31	6.94	7.40
	GM''						0.96	0.72	1.35	1.00	0.67



Appendix 2-3. 親子関係マトリクスの要素表

状況③ A校に進学するかB校に進学するか

	中学生					高校生					
	全体	父-男	父-女	母-男	母-女	全体	父-男	父-女	母-男	母-女	
	n	42	10	11	10	11	101	16	30	24	31
親(a) 自己評定	abi	6.36	6.93	7.20	2.31	8.91	8.36	8.46	8.36	8.39	8.30
	aib	-6.21	-6.27	-4.80	-5.94	-7.80	-4.87	-4.54	-4.62	-5.36	-4.90
	abj	-2.28	-2.64	-1.20	-2.64	-2.70	-0.79	-1.03	0.11	-0.82	-1.54
	ajb	1.34	0.66	3.30	1.65	-0.30	1.60	2.47	1.87	0.27	1.92
親の統制	RC	0.55	1.32	0.15	-1.32	2.06	1.34	1.24	0.88	1.79	1.51
	FC	4.48	4.95	3.75	1.98	7.16	5.42	4.74	5.61	6.33	4.87
	BC	8.10	8.25	8.25	6.27	9.56	7.81	8.25	7.37	7.43	8.33
	GM	-0.20	-0.33	1.13	-1.16	-0.47	1.08	1.34	1.43	0.62	0.95
子(b) 自己評定	abi	8.01	7.92	7.20	8.58	8.40	9.44	9.69	9.79	9.07	9.26
	aib	-7.70	-6.93	-9.30	-7.92	-6.60	-5.29	-3.51	-5.61	-4.26	-6.71
	abj	-0.63	-4.95	0.90	1.32	0	-0.79	-1.03	5.06	1.79	5.00
	ajb	-5.50	-2.64	-7.20	-5.61	-6.30	1.60	2.47	-6.93	-6.05	-8.62
子の統制	RC	10.29	6.27	12.30	11.72	10.65	13.05	12.17	13.70	10.59	14.80
	FC	3.22	4.29	2.10	2.48	4.05	3.68	4.74	3.03	4.54	3.09
	BC	5.42	8.58	4.20	4.79	4.35	1.68	1.03	1.71	2.75	1.18
	GM	-1.46	-1.65	-2.10	-0.91	-1.13	0.24	0.72	0.58	0.14	-0.27
親が推定 した子の 成果	abi	7.81	7.59	8.40	6.27	8.91	8.79	9.28	8.80	8.80	8.52
	aib	-5.81	-7.26	-5.10	-4.29	-6.60	-4.52	-3.30	-3.30	-5.36	-5.64
	abj	4.56	5.28	4.20	4.62	4.20	5.29	3.92	6.60	4.54	5.32
	ajb	-5.81	-6.93	-3.60	-7.26	-5.70	-5.06	-4.54	-3.96	-6.32	-5.43
親が推定 した子の 統制	RC'	12.00	13.53	10.65	11.22	12.71	11.83	10.52	11.33	12.51	12.46
	FC'	1.63	0.99	1.35	2.31	1.91	2.02	3.30	1.43	2.61	1.50
	BC'	1.63	1.32	2.85	-0.66	2.81	1.48	2.06	0.77	1.65	1.71
	GM'	0.19	-0.33	0.98	-0.17	0.20	1.13	1.34	2.04	0.42	0.69
子が推定 した親の 成果	abi						8.63	8.87	9.68	7.01	8.73
	aib						-5.36	-5.77	-4.84	-3.85	-6.81
	abj						-4.28	-6.19	-4.29	-3.57	-3.83
	ajb						4.02	3.71	4.62	3.71	3.83
子が推定 した親の 統制	RC''						1.77	2.79	2.26	1.51	0.96
	FC''						2.85	2.37	2.81	1.79	3.94
	BC''						11.15	12.27	11.72	9.07	11.60
	GM''						0.75	0.16	1.29	0.83	0.48



Appendix 2-4. 親子関係マトリクスの要素表

		状況④ 転居と転校					状況⑤ 男女交際				
		高校生 全体 n	父-男 16	父-女 30	母-男 24	母-女 31	高校生 全体 101	父-男 16	父-女 30	母-男 24	母-女 31
親(a) 自己評定	a1b1	1.60	2.47	2.42	0	1.60	2.61	3.30	2.86	2.89	1.81
	a1b2	-7.48	-7.01	-6.93	-7.97	-7.88	-1.12	-2.20	-0.66	-1.24	-0.96
	a2b1	-4.28	-3.30	-4.73	-3.99	-4.58	-4.85	-5.28	-4.62	-4.40	-5.22
	a2b2	1.86	2.89	1.10	3.30	0.96	2.14	1.76	2.97	2.20	1.49
親の統制	RC	-1.73	-2.07	-0.44	-3.64	-1.33	2.10	2.31	3.36	1.93	2.29
	FC	1.47	1.65	1.76	0.34	1.97	-1.63	-0.77	-2.04	-1.24	-1.97
	BC	7.61	7.84	7.59	7.63	7.51	5.36	6.27	5.56	5.37	4.74
	GM	-2.08	-1.24	-2.04	-2.17	-2.48	-0.31	-0.61	0.14	-0.14	-0.72
子(b) 自己評定	a1b1	6.08	4.12	4.18	6.87	8.30	8.72	8.04	8.47	8.52	9.47
	a1b2	-6.44	-4.54	-5.61	-6.05	-8.52	-4.67	-5.98	-4.51	-3.99	-4.68
	a2b1	2.29	4.95	2.75	1.92	0.75	2.22	3.30	2.75	0.55	2.45
	a2b2	-5.69	-4.95	-5.94	-4.40	-6.81	-7.32	-7.42	-7.04	-6.46	-8.20
子の統制	RC	10.25	9.28	9.24	9.62	12.19	11.47	12.37	11.39	9.76	12.40
	FC	1.52	-0.21	0.88	1.65	2.92	4.58	3.09	4.13	5.22	5.27
	BC	2.27	-0.62	0.55	3.30	4.63	1.93	1.65	1.60	2.75	1.75
	GM	-0.94	-0.11	-1.16	-0.42	-1.57	-0.26	-0.52	-0.08	-0.35	-0.24
親が推定 した子の 成果	a1b1	5.49	6.19	4.40	5.77	5.96	7.09	7.48	7.26	7.29	6.60
	a1b2	-6.73	-5.36	-4.51	-7.97	-8.62	-2.07	-0.44	-1.93	-1.79	-3.19
	a2b1	-0.91	-0.82	-0.11	-0.14	-2.34	2.11	1.76	1.65	3.02	2.02
	a2b2	-5.06	-4.33	-4.62	-5.09	-5.85	-6.37	-5.72	-5.28	-7.15	-7.13
親が推定 した子の 統制	RC'	8.19	7.53	6.71	9.35	9.05	8.82	7.70	8.06	9.63	9.47
	FC'	2.37	2.99	2.31	1.52	2.77	4.64	5.50	4.48	4.82	4.26
	BC'	4.04	4.02	2.20	4.40	5.54	0.34	0.22	1.13	-0.55	0.32
	GM'	-1.81	-1.08	-1.21	-1.86	-2.71	0.19	0.77	0.43	0.34	-0.43
子が推定 した親の 成果	a1b1	0.73	-0.41	-0.23	2.89	0.53	6.60	5.16	6.49	7.15	7.03
	a1b2	-5.61	-5.77	-4.78	-5.50	-6.39	-3.23	-4.12	-2.39	-3.16	-3.62
	a2b1	-3.56	-2.47	-4.21	-3.16	-3.83	-5.81	-5.57	-6.71	-4.12	-6.39
	a2b2	2.64	1.65	2.62	3.16	2.77	2.01	1.44	1.82	1.37	2.98
子が推定 した親の 統制	RC''	-1.98	-2.68	-1.71	-1.31	-2.40	3.59	2.59	4.50	3.37	3.41
	FC''	0.07	0.62	-1.14	1.03	0.16	1.01	1.14	0.18	2.41	0.64
	BC''	6.27	4.74	5.69	7.36	6.76	8.83	8.15	8.71	7.90	10.01
	GM''	-1.45	-1.75	-1.65	-0.65	-1.73	-0.11	-0.77	-0.20	0.31	0